

マスターズスポーツの現状と課題

谷 藤 千 香

千葉大学教育学部

Development of Masters Sport

TANIFUJI Chika

Faculty of Education, Chiba University, Japan

近年、中高年のスポーツが盛んになりつつある。海外では比較的以前から多くのマスターズスポーツ大会が行われていたが、日本ではまだその歴史は浅い。そこで、各競技団体が行う単種目のマスターズ大会や複数種目で行われるマスターズ大会の日本と海外の事例から現状と課題をあげ、今後のマスターズスポーツについて検討した。単種目のマスターズ大会は、日本では陸上競技や水泳が多く実施され、また、いわゆるスポーツ種目のマスターズ大会は欧米で非常に古くから存在していた。複数種目の大会では、日本スポーツマスターズにおいて生き甲斐を感じる参加者が多いものの、年齢区分などいくつかの問題点が見うけられたが、国際的に行われている最も大きなマスターズの大会であるワールドマスターズゲームズでは、可能な限り誰もが参加できるように門戸を開き、多くの参加者をひきつけている。今後のマスターズスポーツには、こうした競技スポーツとレクリエーションスポーツの融合した領域が求められる。

キーワード：マスターズスポーツ (Masters Sport) ワールドマスターズゲームズ (World Masters Games)
スポーツ・フォー・ライフ (Sport for Life)

はじめに

高齢化とともにスポーツへのニーズが多様化し、中高年のスポーツ愛好者の活動機会が拡大しつつある。日常の活動もさることながら、60歳以上のスポーツ交流大会として知られる「全国健康福祉祭(ねんりんピック)」, 日常的ゲーム志向者や健康・体力づくり志向者の祭典として年齢別の競技種目が実施され先ごろ幕を閉じた「全国スポーツ・レクリエーション祭」に加え、競技志向の高い中高年を対象とした全国規模の総合スポーツ大会である「日本スポーツマスターズ」も11回を数えた。マスターズ大会とは、中高年の参加者によって競われるスポーツ競技大会であり、日本においては、1980年の第1回日本マスターズ陸上競技会開催以降、各競技団体で様々な大会が行われるようになった。マスターズ大会、マスターズスポーツという、中高年を対象とした一部の人々のためだけのエリートスポーツという固定観念を持つ人も多いが、海外では各種マスターズ大会が様々な形で開催され、技を磨き合うというスポーツの本質的な楽しみ方を加齢に伴って発展・成熟させていこうとする熟年層が増加しているとも言われる。そこで、こうした中高年のスポーツの現状と課題を明らかにし、アクティブシニアと言われる中高年の生き甲斐づくりと彼らを中心とした生涯スポーツ社会の実現の方向性を模索する。

中高年の運動・スポーツ実施状況

内閣府の「体力・スポーツに関する世論調査」によると、この1年間に行った運動・スポーツの日数は、週に3日以上と答えた者の割合は70歳以上が最も高く、次い

で60歳代、50歳代の順となっている。また、定期的スポーツ実施者とされる週1回以上と答えた者を合わせると60歳代が最も高く、次いで50歳代、70歳以上、40歳代の順で、中高年の運動・スポーツへの積極さが見てとれる。

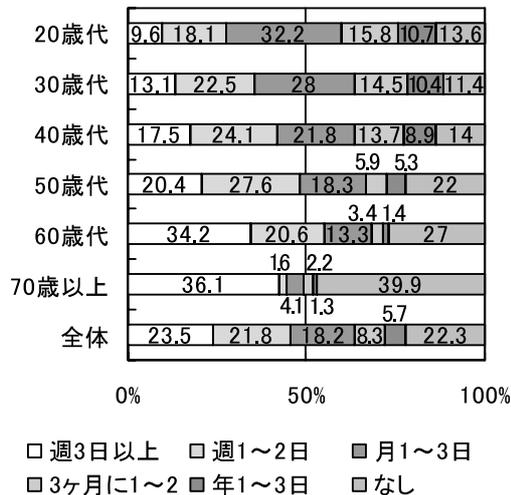


図1 年代別にみた運動・スポーツの実施状況(日数)
(内閣府「体力・スポーツに関する世論調査」2009)

しかしながら、その一方で、過去1年間にまったく運動・スポーツを行わなかった者も70歳以上が最も高く、次いで60歳代、50歳代と、中高年の運動・スポーツに対する二極化現象が見られる。また、30歳代、40歳代は、年1回以上は実施しているものの、年に1～3日や3ヶ月に1～2日と定期的な運動・スポーツ実施とは言えない人が他の年代に比べてやや多く、こうした層へのアプ

ローチが求められる。

マスターズスポーツ関連イベントの動向

谷ら(2006)は、国内外で開催されているマスターズスポーツ関連イベントを、「国際レベル」「複数国レベル」「全国レベル」「地域レベル」からなる4つの開催規模レベルと、複数の競技種目が1つの大会で行われる「複数種目開催型」と1つの競技種目だけを行う「単種目開催型」からなる2つのタイプをクロスさせた計8つのカテゴリーに類型化、各カテゴリーに該当するイベントを確認し、近年のマスターズスポーツの機会の拡大を指摘している。また、各大会における競技種目は、①歩行・走力・サイクリング系、②体操・ダンス・トレーニング系、③水泳系、④球技・チームスポーツ系、⑤アウトドアスポーツ系、⑥ウォーター・マリンスポーツ系、⑦ウィンタースポーツ系、⑧武道・武術系、⑨ゲームスポーツ系の9分野、123種目に及び、狭く限定的に考えられている傾向が強かった熟年層を対象としたマスターズスポーツ競技種目の範囲は広く、マスターズスポーツ文化の拡がり浸透が進んでいく中で、エイジングとスポーツに対するこれまでの固定観念が改善され、生涯スポーツ文化全体の発展に繋がっていくことが期待されている。

競技別のマスターズ大会（単種目開催型）

○陸上競技

陸上競技におけるマスターズは、1932年に英国で始められ、その後欧米に広がり、1975年にカナダのトロントで第1回世界マスターズ陸上競技選手権大会が開催された。世界マスターズ陸上競技連盟(World Masters Athletics)は大会の参加に必要な標準記録を設定せず、健康であれば参加でき、競技運営に支障のない範囲で記録も計測される。

日本では、1980年に日本マスターズ陸上競技連合が創立され、同年第1回全日本マスターズ陸上競技選手権大会が和歌山で開催、以後毎年開催されている。2001年に日本体育協会により日本スポーツマスターズが開催され、陸上競技も第3回までは実施していたが、2004年から日本マスターズ陸上競技連合が行う日本マスターズ陸上競技選手権大会だけになった。参加資格は35歳以上で、5歳刻みで100歳以上のクラスまで設定されている。競技成績に関係なく会員になれ、生涯楽しく同年代の人々と競技ができるばかりでなく、大会や記録が5歳刻みで行われるため、5年毎にクラス別の最若手となり記録更新・上位入賞のチャンスとなる。また、日本マスターズ陸上競技連合は、競技記録志向、健康管理、仲間作りの機会など、誰でも気軽に、誰にも強制される事なく自分の体力と人生観に従って競技を楽しむことを推奨し、競技種目を変えた新しいチャレンジの可能性をも打ち出している。

○水泳

国際水泳連盟が行う世界マスターズ大会は、1986年に

第1回が東京で開催され、2年毎の開催で2012年には第14回大会がイタリアで開催される。年齢区分は25歳から5歳刻みで必要なだけのカテゴリーに分けられ、100歳以上の記録も公認されている。

日本では、日本マスターズ水泳協会の主催大会を含め年間約90の公認大会が開催されている。年齢区分は、18歳～24歳、25歳より上は5歳ごとに100歳以上までと、国際水連盟に比べ若い年代から区分があるのが特徴である。

○バドミントン

国際バドミントン連盟が行う世界シニア選手権大会は2003年に第1回大会がブルガリアで開催され、以後約2年に1回開催されている。35歳から5歳刻みで年齢区分されており、各国からの参加者数の制限もある。また、陸上競技や水泳のような記録の公認と異なり対戦相手が必要なため、エントリーが少なければ他のカテゴリーと一緒に試合を行うことが大会要項にあらかじめ記載されており、2011年の第5回カナダ大会では新設された70歳以上のエントリーが規定数に達せず、65歳以上と同じカテゴリーで試合が行われた。

日本では、日本バドミントン協会の主催で1984年に第1回全日本シニア選手権大会が開催され、以後毎年開催されている。当初は30歳以上から10歳刻みで年齢区分されていたが、世界シニア大会開催後、5歳刻みとなった。2011年の第28回大会では男女75歳以上が公開種目として新設された。

諸外国で行なわれるマスターズ大会は、マスターズ陸上開始以前の1905年にイギリスで開催され、1948年にはカナダにおいても開催されている。大会は競技ばかりでなくパーティなど交流の場も用意されている。

マスターズの総合スポーツ大会（複数種目開催型）

○全国健康福祉祭（ねんりんピック）

高齢者を中心とするスポーツ、文化、健康と福祉の総合的な祭典として、厚生省創立50周年を記念して1988年10月に第1回大会が兵庫県で行われ、厚生労働省・開催地・長寿社会開発センターにより、以後毎年開催されている。健康および福祉に関する積極的かつ総合的な普及啓発活動の展開を通じ、高齢者を中心とする国民の健康の保持・増進、社会参加、生きがいの高揚等を図り、ふれあいと活力ある長寿社会の形成に寄与することを目的とし、高齢者の幅広い参加や楽しさに重点をおいた「ス

表1 全国健康福祉祭の競技

スポーツ交流大会	卓球、テニス、ソフトテニス、ソフトボール、ゲートボール、バタンク、ゴルフ、マラソン、弓道、剣道
ふれあいスポーツ交流大会	グラウンド・ゴルフ、なぎなた、ウォークラリー、太極拳、ソフトバレーボール、サッカー、ダンススポーツ、ボウリング

(第24回全国健康福祉祭くまもと大会HPより作成)

ポーツ交流大会」や、開催都道府県の特徴を取り入れた「ふれあいスポーツ交流大会」が実施されている。主たる参加者は60歳以上であるが、世代間交流などの事業も行われ、延べ参加人数は40～50万人と言われる。

○全国スポーツ・レクリエーション祭

勝敗のみを競うのではなく、誰もが、いつでも、どこでも気軽にスポーツ・レクリエーション活動を楽しみ、交流を深めることを目的として行われた生涯スポーツの一大祭典である。1988年11月、第1回大会が山梨県で開催され、文部科学省、日本体育協会、日本レクリエーション協会、全国体育指導委員連合と開催都道府県の共催で、2011年まで各都道府県持ち回りで開催された。

広く国民にスポーツ・レクリエーション活動を全国的な規模で実践する場を提供することにより国民1人ひとりのスポーツ・レクリエーション活動への参加意欲を喚起し、もって国民の生涯を通じたスポーツ・レクリエーション活動への振興に資することを目的とし、全国から集う参加者と観客が一体となり和やかにふれあうことができる友好と交流の場としての「開会式」、スポーツ・レクリエーション体験コーナーや開催県の魅力をアピールするコーナーなど、幼児から高齢者まで幅広い層が参加し楽しめる各種講習の場としての「特別行事」、年齢・体力に応じて誰でもが楽しく参加できるスポーツ・レクリエーション種目を行う「種目別大会」、で構成される。種目別大会は、各年齢・体力に応じて楽しく参加し各都道府県の代表選手が参加する「都道府県代表参加種目」と一定の条件を満たせば誰もが参加できる「フリー参加種目」に大別され、毎年1～2万人が参加した。

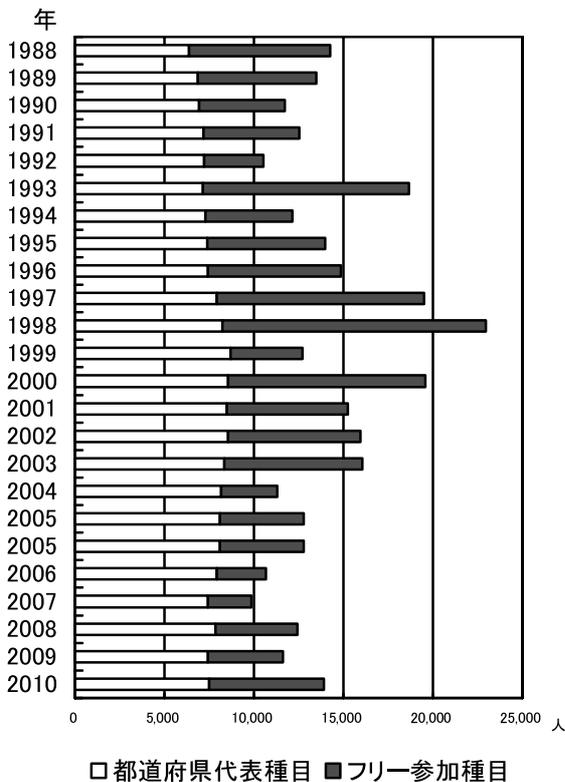


図2 全国スポーツ・レクリエーション祭の参加者 (日本体育協会HPより作成)

最終回の「スポレク“エコとちぎ”2011」では、「都道府県代表参加種目」18種目と「フリー参加種目」10種目が設けられた。フリー参加種目には、ウォークラリー、ドッジボール、フライングディスク、キンボール、テーブル、太極拳、スポーツチャンバラ、ユニカール、ペタンク、3B体操と比較的軽い種目が多く、一部小学生だけに限定されたものもあるが、基本的に年齢を問わず誰でも参加できる。

都道府県代表参加種目については、原則として、過去の全国スポーツ・レクリエーション祭に参加したことのない者が優先参加、同年の国民体育大会に選手として出場する者は参加不可、当該種目の競技団体主催の全国大会へ選手として出場した者への参加制限など、気軽にスポーツ・レクリエーションを楽しむことや交流を深めることが重視され、より多くの人々が参加しやすいよう参加者資格等が規定されている。また、いわゆるニュースポーツの競技種目には年齢制限がないが、18種目中11種目で何らかの形で年齢制限がされており、大会名に付記されていないものの、日本におけるマスターズの総合スポーツ大会の先駆けと言える。

表2 第24回全国スポーツ・レクリエーション祭の都道府県代表参加種目と年齢区分

20歳～	グラウンド・ゴルフ、ゲートボール、ターゲット・バードゴルフ、バウンドテニス、インディアカ、フォークダンス、エアロビック
30歳～	女子ソフトボール 年齢別テニス (30歳～・40歳～・50歳～) 年齢別バドミントン (30歳～・40歳～・50歳～)
35歳～	マスターズ陸上競技 (女子 5歳刻み8クラス)
40歳～	ソフトバレーボール (試合中コート内には常に男女40歳代2人と男女50歳以上2人の計4人でプレー) ラージボール卓球 (40歳～・50歳～・60歳～) マスターズ陸上競技 (男子 5歳刻み9クラス)
45歳～	年齢別ソフトテニス (45歳～・50歳～・55歳～)
50歳～	壮年サッカー (男子) 壮年ボウリング (50歳代・60歳以上)
その他	男女混合綱引 (20歳以上かつ8人の合計年齢260歳以上) トランポリン (20歳～・30歳～・40歳～)

○日本スポーツマスターズ

スポーツ愛好者の中で競技志向の高いシニア世代を対象としたスポーツの祭典であり、参加者がお互いに競い合いながらスポーツに親しむことにより、生涯スポーツのより一層の普及・振興を図り、併せて生きがいのある社会の形成と健全な心身の維持・向上に寄与することを目的として、2001年に第1回大会が宮崎県で行われ、以後毎年開催されている。日本体育協会、開催都道府県および開催都道府県体育協会が主催となり、原則として都道府県持ち回り、同一都道府県内で開催、各競技会については実施中央競技団体と会場地市町が加わり実施と、

まさに国民体育大会の中高年版である。参加資格として年齢制限があり、原則として35歳以上、競技ごとに規定がある。

谷ら（2006）の日本スポーツマスターズの参加者に対

する意識調査によると、マスターズスポーツの楽しさは年齢が増すほど楽しくなる傾向があり、加齢とともに楽しさの幅を拡大させているという。マスターズスポーツの楽しさの具体的内容もスポーツの本質的な楽しさに関

表3 日本スポーツマスターズの概要

開催期間	開催地	参加者数	競技種目
2001. 9. 21-25	宮崎	5,354	12競技（陸上競技、水泳、サッカー、テニス、バレーボール、バスケットボール、ソフトボール、バドミントン、空手道、ボウリング、 <u>綱引</u> 、ゴルフ）
2002. 11. 8-12	神奈川	6,063	13競技（陸上競技、水泳、サッカー、テニス、バレーボール、バスケットボール、 <u>自転車競技</u> 、ソフトボール、バドミントン、空手道、ボウリング、 <u>綱引</u> 、ゴルフ）
2003. 9. 19-28	和歌山	5,863	13競技（陸上競技、水泳、サッカー、テニス、バレーボール、バスケットボール、 <u>自転車競技</u> 、ソフトボール、バドミントン、空手道、ボウリング、 <u>綱引</u> 、ゴルフ）
2004. 9. 22-26	福島	5,817	12競技（水泳、サッカー、テニス、バレーボール、バスケットボール、 <u>自転車競技</u> 、ソフトボール、バドミントン、空手道、ボウリング、 <u>綱引</u> 、ゴルフ）
2005. 9. 22-26	富山	6,154	12競技（水泳、サッカー、テニス、バレーボール、バスケットボール、 <u>自転車競技</u> 、 <u>軟式野球</u> 、ソフトボール、バドミントン、空手道、ボウリング、ゴルフ）
2006. 9. 15-21	広島	6,658	13競技（水泳、サッカー、テニス、バレーボール、バスケットボール、 <u>自転車競技</u> 、 <u>軟式野球</u> 、 <u>ソフトテニス</u> 、ソフトボール、バドミントン、空手道、ボウリング、ゴルフ）
2007. 9. 14-20	滋賀	7,308	13競技（同上）
2008. 9. 19-26	高知	7,347	13競技（同上）
2009. 9. 18-21	静岡	7,644	13競技（同上）
2010. 9. 17-21	三重	7,703	13競技（同上）
2011. 9. 16-20	石川		13競技（同上）

（日本体育協会HPより作成。競技種目のアンダーラインは途中でなくなった種目もしくは途中で追加された種目）

表4 日本スポーツマスターズの年齢区分

	男子	女子
水泳	個人種目／30～34歳，35～39歳，40～44歳，45～49歳，50～54歳，55～59歳，60～64歳 リレー種目／30～39歳，40～49歳，50～64歳	
サッカー	40歳以上	
テニス	35歳以上シングルス・45歳以上ダブルス	40歳以上シングルス・ダブルス
バレーボール (9人制)	40歳以上	35歳以上
バスケットボール	40歳以上	40歳以上
自転車競技	35～39歳，40～44歳，45～49歳，50～54歳，55～59歳，60歳以上	35歳以上
ソフトテニス	35歳以上女子・35歳以上男子・45歳以上女子・45歳以上男子・35歳以上女子と45歳以上男子の混合の5種の団体戦	
軟式野球	40歳以上	
ソフトボール	40歳以上	35歳以上
バドミントン	40歳以上・45歳以上・50歳以上の3種の団体戦	40歳以上・45歳以上・50歳以上の3種の団体戦
空手道	組手／40～44歳，45～49歳，50～54歳，55～59歳，60～64歳，65～69歳，70歳以上 形／40～49歳，50～59歳，60～69歳，70歳以上	組手／35～39歳，40～44歳，45歳以上 形／40～49歳，50歳以上
ボウリング	45歳以上	45歳以上
ゴルフ	55歳以上	50歳以上

する記述が多く、マスターズスポーツ参加者が「する・競う・極める」といった楽しさを発展・熟練させていることがうかがえるほか、「育てる」「癒す」「魅する」「巡る」楽しさといった若者のスポーツにはほとんどみられない、マスターズスポーツ特有の楽しさが観察されたという。この調査は、2002年と2003年に行われた日本スポーツマスターズの参加者に対して行ったものであり、2001年に第1回が開催され、その後の大会の成功が伺える。しかしながら、各競技毎に定められている年齢規定をみると、一部には5歳刻みで年齢区分をしていたり、70歳以上の部を設けたりしているものもあるが、40歳以上あるいは50歳以上のように全体として下限を設けているのみのものが多い。40歳代でデビューをしてマスターズスポーツに魅せられ数年間は年齢が増すほど楽しくなるとしても、10年後には参加はできても他の選手と競うのは厳しくなり、20年後には都道府県代表となるのが難しくなり、活動の場を移らざるを得ないことが推察される。先に述べた「全国健康福祉祭（ねんりんピック）」は、主として60歳以上の参加者を対象としてはいるが、健康増進はもとより、スポーツの発展・熟練を目指した日本スポーツマスターズ後の場としてはやや趣向が異なってしまう。今後、マスターズスポーツに魅せられた人々が年齢を重ね続けても参加し続けられる大会であり続けるためには、課題となるであろう。

ワールドマスターズゲームズ（World Masters Games）

ワールドマスターズゲームズは、世界で最も大きな国際総合スポーツ大会で、国際マスターズゲームズ協会（The International Masters Games Association；以下IMGA）の主催で、4年ごとに開催される。参加者はオリンピック大会の約2倍で、4年に1度開催ということもあってか、中高年のオリンピックと言われる事も少なくないが、オリンピックとの基本的な違いは、ワールドマスターズゲームズは単に一部のエリート選手ばかりでなく、あらゆる人が参加可能であり、参加者は国の代表ではなく自分自身もしくはチームの代表ということである。参加資格年齢の下限は、実施される競技を管轄する国際競技連盟により異なるが、概ね25歳から35歳の間で、競技は5歳ごとに区切られ実施される。年齢以外には参加資格は設けられておらず、個人登録が基本で誰でも参

加できる。

1985年に第1回大会がトロントで開催され、22競技に8,305人が参加した。第1回大会に参加した岩岡（1986）に、“Sport for Life”の理想を推し進め、記録を追及している競技者や健康のために身体を動かしている人々など多種多様な、いわゆる熟年（mature）の参加者にその機会を提供しようということで、中高齢者のスポーツに関して多種目が同時に同一地区での開催ははじめての試みで、参加可能な年齢の下限は25歳（ダイビング）から55歳（射撃）と種目により大きく異なり、特に厳密な規定があるとも思われず、「規定があるようでほとんどできない点に大会の性格がよく反映されていると考えることもできなくはない」とレポートされるほどであった。また競技参加者とその家族などを含めてスポーツを通じての交歓風景、観衆の身近で行われた表彰式、優勝者の名前を開催都市であるトロント市に永久保存するサイン会の開催など競技場以外での交流を深める機会についても言及されている。

第3回大会開催翌年の1995年10月25日、IMGAが設立された。IMGAは、IOCによって承認され、ローザンヌに本部をおき、オリンピックムーブメントの支援およびオリンピック憲章の“スポーツフォアオール”哲学の推進を目的とし、「人生のためのスポーツ（Sport for Life）」という理念の下でワールドマスターズゲームズを開催している。

2010年には、第1回世界冬季マスターズゲームズ（World Winter Masters Games）がスロベニアで開催され、7競技に42か国から3,000人が参加した。第2回は2015年にイタリアで行われる。

World Masters Games 2009の事例

第7回ワールドマスターズゲームズは、オーストラリアでの3回目の開催となり、2000年に行われたシドニーオリンピックの会場を中心とした地域で行われた。組織委員会によって翌年まとめられた最終報告書によると、28,676人の競技者、2,866人の同伴者、1,197人のチーム責任者、チームスポーツの審判員505人など、過去最高の計33,244人が参加した。競技者は男性が59%、女性が41%で、25歳から101歳までで平均年齢は50歳であった。

表5 World Masters Gamesの概要

開催年月日	開催地	競技	国	参加者数	大会テーマ
1985. 8. 7-25	Toronto/Canada	22	61	8,305	The Year of the Masters
1989. 7. 22-8. 8	Aalborg, Aarhus, Herning/Denmark	37	76	5,500	Sport for Life
1994. 10	Brisbane/Australia	30	74	24,500	The Challenge Never Ends
1998. 8. 9-22	Portland, Oregon/USA	28	102	11,400	The Global Celebration of Sport for Life
2002. 10. 5-13	Melbourne/Australia	26	98	24,886	The Biggest Multi-sport Festival on Earth
2005. 7. 22-31	Edmonton/Canada	25	89	21,600	A Festival of Sport in the City of Festivals
2009. 10. 10-18	Sydney/Australia	28	95	28,676	Fit, Fun & Forever Young
2013. 8. 2-11	Turino (Italy)	30			Sport for life, Sport for all

新たに100歳以上の新規カテゴリーが設けられ、いくつかの世界記録が樹立され、日本でも多くのメディアに取り上げられた。

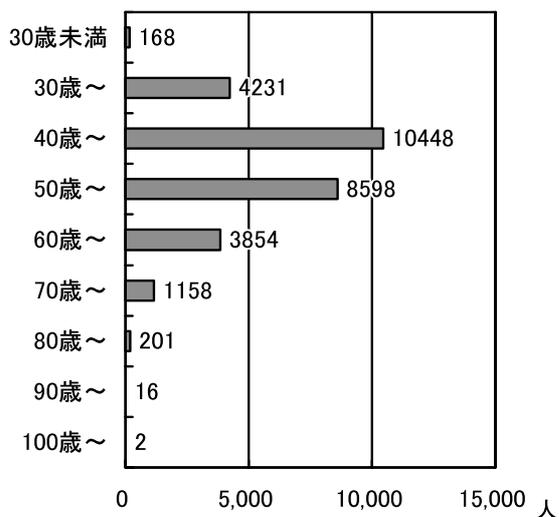


図3 WMG 2009の年代別競技者数

(Sydney 2009 World Masters Games Organising Committee, Sydney WMG 2009-Final Report, 2010より作成)

競技には毎回必ず実施するコア競技17競技と開催地ごとのオプション競技があり、オプション競技は、ワールドマスターズゲームズや他の類似イベントで伝統のあるもの、参加者数が期待できるもの、当該スポーツ連盟の同意が得られるもの、地域特性に合致し施設利用可能なもの、の基準で選ばれる。

表6 WMG 2009の競技種目

コア競技	Archery, Athletics, Badminton, Basketball, Canoe/Kayak, Cycling, Football, Hockey, Orienteering, Rowing, Shooting, Softball, Squash, Table Tennis, Weightlifting
オプション競技	Baseball, Diving, Golf, Lawn bowls, Netball, Rugby Union, Sailing, Surf lifesaving, Swimming, Tennis, Touch football, Volleyball, Water polo

競技種目別の参加者は、サッカーが3,000人と最も多く、次いで陸上競技の2,787人、ソフトボール2,618人であった。オプション競技として選ばれた水泳やネットボールなどの参加者も多かった。こうした参加者をひきつける要因の一つに、ディビジョン制がある。各競技種目へのエントリーはすべて個人で行うが、各競技ごとに年齢区分のほかにディビジョンがあり、ディビジョンAは国際レベル、Bは国レベル、Cは地域レベルと書かれてはいるもののエントリーは自己申告、各々がそれぞれの目標に向かってスポーツを楽しむことが基本である。負けても何らかの形で複数の試合が楽しめるようスケジューリングされていたり、大会期間中に何回ものパーティが企画されていたり、いたるところで交流の仕組みが施されていた。総勢5,000人と言われるボランティアのサポートがそれを可能としているが、大会後半には負けてしまった人にもボランティアを呼び掛け、参加者全

員で大会を盛り上げていた。組織委員会が行った参加者調査によると、参加者全体では4人に3人は過去のWMGに参加していなかったが、海外からの参加者の5人に1人は2002年のメルボルン大会に参加、2人に1人は2005年のエドモントン大会に参加している。また、全体参加者の3人に2人は2013年のトリノ大会に参加したいと考えている、という。人との繋がりを重視した大会ならではの結果ではないかと思う。また、スポーツツーリズムについても注目される。国際大会とは言えオーストラリア国内の参加者が3分の2以上を占めるものの、海外から参加した競技者も多く8,587人と過去最高であり、そのうち2,242人は前回大会の開催地カナダからであった。日本は、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド(1,395人)、アメリカ(899人)、ロシア(416人)、イギリス(396人)、ドイツ(254人)、ブラジル(253人)に次いで第9位(221人)であった。また、シドニー外からの参加者は平均して11.6泊滞在し、海外からの参加者は平均して19.9泊している。当初5,000万ドルの経済効果を予測していたが、2009年で6,020万ドルの経済効果があったとみられている。

マスターズスポーツの役割

長ヶ原(2007)は、マスターズスポーツを「過去の成績や現在のスポーツレベルにとらわれず、成人・中高年を含めた熟年層の個々人が、自己のスポーツ意欲や技術、楽しみ方を成熟化させていこうとするスポーツのセカンドライフ」と定義している。「技を磨き競う」というスポーツの最も本質的な楽しみ方を加齢に伴って発展・成熟させていこうとする熟年アスリート人口が急速に増加し、海外ではマスターズスポーツイベントが多く開催されるようになった。国際大会という敷居が高そうだが、そのほとんどが海外からの参加が可能なオープン大会であり、誰もが参加できる。日本のスポーツの仕組みは、地域大会、県大会、全国大会、世界大会と各領域を勝ち抜き選抜された者が次の大会に出られるというものが多く、いまだそうした仕組みに縛られる場合も少なくない。競技スポーツとレクリエーションスポーツの狭間、あるいは両者を併せもった新たな方向性としてマスターズスポーツを考えていけないだろうか。スポーツは人に支えられている。こうしたマスターズスポーツイベントの参加を通してスポーツとの新たな関わりをもった中高年が、スポーツを支えていけるのではないだろうか。

＜参考資料・文献＞

- 1) 岩岡研典, 熟年のオリンピックー第1回世界マスターズ大会に参加してー, 体育の科学, 1986, pp. 71-74
- 2) 谷めぐみ・彦次佳・長ヶ原誠, マスターズスポーツの動向, 体育の科学 Vol. 56 No. 5, 2006
- 3) 長ヶ原誠, ジェロントロジースポーツ総論, 株式会社ジェロントロジースポーツ研究所, ジェロントロジースポーツ, 2007
- 4) 内閣府「体力・スポーツに関する世論調査」2009

- 5) Sydney 2009 World Masters Games Organising Committee, Sydney 2009 World Masters Games-Fact Sheet.
- 6) Sydney 2009 World Masters Games Organising Committee, Sydney WMG 2009-Final Report, 2010.